

小型化する？大正川のクサガメ

和亀保護の会 西堀智子・久米卓美

和亀保護の会では2004年7月から大阪府茨木市・摂津市を流れる大正川でカメ類の捕獲調査を行なっている。今回、2019年6月までの15年間の捕獲データをまとめ、大正川におけるクサガメの生息状況の変化について考察した。

Suzuki et al.(2011)の研究から、日本に生息しているクサガメの遺伝子型の中で主に近畿や四国を中心に広く確認されたグループは朝鮮半島由来、東日本と九州で確認されたグループは中国由来であることが分かっている。またペットとして販売されてきたクサガメが中国産であること（青木，1990）に加えて、安川（2007）・矢部（2009）・青木（2014）のクサガメの外部形態についての報告から、ペット由来、つまり中国由来のクサガメは朝鮮半島由来のクサガメに比して小型で模様が派手な傾向があることが指摘されている。

大正川で15年間に捕獲されたクサガメのメスの平均背甲長は176.7mm（n=1205）、オスの平均背甲長は144.6mm（n=1225）であった。背甲長を10mmごとに区切った個体数では、メスが175～185mmで最も多く、オスが145～155mmの区間で最も多かった。また大正川のクサガメの模様や色については比較的地味な個体が多かった。

捕獲したクサガメの雌雄の数を見ると、活動を始めて数年間はメスがオスよりも僅かに多いかほぼ拮抗しているかであったのに対して、それ以降はオスが多い傾向にあった。また15年を5年ごとに区切って背甲サイズ毎の個体数を調べると、メスでは最も個体数の多い背甲長は大きい方にズレてきており、個体群が緩やかに高齢化しているように見えた。オスについては背甲サイズの小さい若齢個体の占める割合が大きくなってきているように見えた。

大正川と同様の方法で2013年から2016年にかけて行なった兵庫県加古川市の峠池の調査では、平均背甲長がメスで38.4mm、オスで27.7mm大正川の個体よりも小さく、小型のオスの割合が多かった。また腹甲のラインが派手な個体も複数観察された。

峠池は住宅街の中にあるため池であり、近くには小学校もある。このため子供たちが飼育していたペットの中国由来のクサガメが遺棄され繁殖した可能性は高い。少数残っている大きな個体はもともと生息していた朝鮮半島由来のクサガメだと思われるが、比較的短期間に中国由来のクサガメに置き換わったのではないかと推測している。また峠池は日当たりのよいため池で総じて日陰は少ない。カメが温度依存性決定であることを考えればメスの比率が高くなるのが自然であるが、捕獲数はオスがメスの1.4倍であった。

これらのことから大正川では、大型の朝鮮半由来の個体群が衰退し、峠池のクサガメのように小型でオスの多い中国由来の個体、もしくは交雑個体が徐々に増えてきているのではないかとと思われる。

